令和３年度

帰　国　生　入　試

高等学校 入学試験問題

国　語

注　　意

1　合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2　始めの合図があったら、解答用紙の決められた欄に、受験番号、氏名を記入してから始めなさい。
3　声を出して読んではいけません。
4　解答は解答用紙の決められた欄に筆記具ではっきりと書き入れなさい。
5　試験時間は50分です。
6　計時機能以外の時計の使用は認めません。
7　試験中、体の具合や気分が悪くなったときは、静かに手をあげなさい。
8　終わりの合図があったら、すぐに筆記具を置きなさい。

【一】次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

住空間をきれいにするには、できるだけ空間から物をなくすことが肝要ではないだろうか。ものを所有することが豊かであると、僕らはいつの間にか考えるようになった。

高度成長の頃の三種の神器は、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、その次は、自動車とルームクーラーとカラーテレビ。戦後の飢餓状態を経た日本人は、いつしか、ものをアソッセンして所有することで、豊かさや充足感を噛み締めるようになっていったのかもしれない。しかし、考えてみると、快適さとは、溢れかえるほどのものに囲まれていることではない。むしろ、ものを最小限に始末したほうが快適なのである。何もないという簡潔さこそ、高い精神性や豊かなイマジネーションを育む温床であると、日本人はその歴史を通して、達a観したはずである。

※慈照寺の同仁斎にしても、桂の離宮にしても、空っぽだから清々しいのであって、ごちゃごちゃと雑貨やら用度品やらで溢れているとしたなら、目も当てられない。イセンレンを経た居住空間は、簡素にしつらえられ、実際にこの空間に居る時も、ものを少なくすっきりと用いていたはずである。用のないものは、どんなに立派でも蔵や納戸に収納し、実際に使う時だけ取り出してくる。それが、①日本的な暮らしの作法であったはずだ。

しかしながら、今の日本の人々の住宅は、仮に天井をはがして俯瞰するならば、どこの世帯もおおむね夥しいもので溢れかえっているのではないかと想像される。ソッセンして所有へと突き進んだ結果である。②かつて腹ぺこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケットを持っていないと不安なのである。しかし冷静に判断するなら、両方の手に何も持っていない方が、生きていく上では便利である。両手が自由なら、それを振って挨拶もできるし、時には花を活けることもできよう。両の手がビスケットでいつも塞がれていては、そういうわけにもいかない。

ピーター・メンツェルという写真家の作品に『地球家族』と題された写真集がある。これは多様な文化圏の家族を撮影したものだ。それぞれの家族は、全ての家財道具を家の前に持ち出して並べ、家を背景にして写真に収まっている。どのくらいの国や文化、家族の

写真が収められていたかは正確に記憶していないけれども、鮮明に覚えているのは、日本人の家財道具が群を抜いて多かったことである。日本人は、いったいいつの間にこんなにたくさんの道具に囲まれて暮らし始めたかと、唖然とした気持ちでそれを眺めた。無駄と言い切ることはできないまでも、なくてもよいものたちを、よくぞここまで細かく取り揃えたものだとあきれる。別の言い方をするならば、ものの生産と消費の不毛な結末を静かに指摘しているようなその写真は、③僕らがどこかで道を間違えてしまったことを暗示しているようであった。

ものにはそのひとつひとつに生産の過程があり、マーケティングのプロセスがある。石油や鉄鉱石のような資源の採掘に始まる遠大なものづくりの端緒に遡って、ものは計画され、修正され、実施されて世にかたちをなしてくる。A 広告やプロモーションが流通の後押しを受けて、それらは人々の暮らしのそれぞれの場所にたどり着く。そこにどれほどのエネルギーが消費されることだろう。その大半が、なくてもいいような、※雑駁とした物品であるとしたらどうだろうか。資源も、創造も、ユソウも、電波も、チラシも、コマーシャルも、それらの大半が、暮らしに濁りを与えるだけの結果しかもたらしていないとするならば、これほど虚しいことはない。

僕らはいつしか、もので溢れる日本というものを、度を超えてキョウしてしまったかもしれない。世界第二位であったGDPを、目に見えない誇りとして頭の中に装着してしまった結果か、あるいは、戦後の物資の乏しい時代に経験したものへの渇望がどこかで幸福を測る感覚の目盛りを狂わせてしまったのかもしれない。秋葉原にしてもブランドショップにしても、過剰なる製品供給の情景は、ものへの切実な渇望をひとたび経験した目で見るならば、確かに頼もしい勢いに見えるだろう。だから、いつの間にか日本人はものを過剰に買い込み、その異常なる景に鈍感になってしまった。

B、そろそろ僕らはものを捨てなくてはいけない。④捨てることのみを「もったいない」と考えてはいけない。捨てられるものの風情に感情移入して「もったいない」と感じる心持ちにはもちろん共感できる。しかし膨大な無駄を排出した結果の、廃棄の局面でのみ機能させるのだとしたら、その「もったいない」はやや鈍感に過ぎるかもしれない。廃棄する時では遅いのだ。もしそういう心情を働かせるなら、まずは何かを大量に生産する時に感じた方がいいし、さもなければそれを購入する時に考えた方がいい。もったいないのは、捨てることではなく、廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。

だから大量生産という状況についてもう少し批評的になった方がいい。無闇(むやみ)に生産量を誇ってはいけないのだ。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴイスティックな成長意欲だけではない。所有の果てを想像できない⑤消費者のイマジネーションの脆弱(ぜいじゃく)さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。さして必要でもないものを溜(た)め込むことは決して快適ではないし心地よくもない。

（原研也『日本のデザイン』より）

※慈照寺の同仁斎…銀閣寺にある一室のこと　※雑駁…雑然として統一がないこと

※プロダクツ…製品、生産物

設問において字数を指定された場合、句読点・記号も一字とする

問　一　二重傍線部ア～オの漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問　二　二重傍線部a「達観」b「プロセス」の意味として最も適当なものを、それぞれ語群から選び、記号で答えなさい。

a「達観」

ア　目的を果たすこと　イ　遠くを観ること　ウ　真理・道理を悟ること　エ　役割を全うすること

b「プロセス」

ア　手順・経過　イ　結果　ウ　因果関係　エ　順応

問三 A 、 B に入る言葉として最も適当なものを、それぞれの語群から選び、記号で答えなさい。

A　ア さらに　イ つまり　ウ あるいは　エ だから

B　ア そのため　イ しかし　ウ さらに　エ なぜなら

問四 傍線部①「日本的な暮らしの作法」とありますが、筆者は住空間に関してどのようにすることが大切だと考えていますか。本文中から十六字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問五 傍線部②「かつて腹ぺこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケットを持っていないと不安なのである」とありますが、これはどのようなことを表現していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 食料や物資が極端に不足した戦時中の暮らしを経験した日本人が、ものを豊富に所有していなければ満たされなくなったということ。

イ 戦後の大胆な経済政策によって財産を蓄えた日本の新たな富裕層が、現状に満足せずにさらに多くの金品を所有することにこだわること。

ウ 開国によって急速に外国の文化を取り入れた日本人が、新しい時代の中で日本古来の文化と新しい西洋文化とを共存させようとしたこと。

エ 日本伝統の簡素な文化様式が世界的には評価されないと知った日本人が、西洋で人気のある華やかな装飾を取り入れるようになったということ。

問六　傍線部③「僕らがどこかで道を間違えてしまった」とありますが、筆者が考える日本人本来の生活とはどのようなものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　必要なものだけを配置することによって、本来ならば手に入れることのできない豊かさを感じられる生活
イ　使い捨てを最大に活用して物を出来る限り捨てることで、豊かさと充足感を感じられる生活
ウ　快適さを求め常に新しいものを手に入れることで、豊かさを感じることができる生活
エ　必要最小限の物しか置かないようにして質素な空間を生み出すことで、精神的な豊かさを感じられる生活

問七　傍線部④「捨てることのみを、『もったいない』と考えてはいけない」とありますが、筆者が「もったいない」と考えるべきだというのはどのようなことですか。本文中から三十五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問八　傍線部⑤「消費者のイマジネーションの脆弱さ」とありますが、消費者が本来想像しなくてはいけないことはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

問九　本文を踏まえて、「あなたの住空間において不要なもの」を一つ挙げ、その理由とともに答えなさい。

【二】次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（ここまでのあらすじ）

「私」はわけあって義理の父（森宮さん）と二人で暮らすことになり数年が経った。中学三年生の合唱祭のクラス伴奏者に選ばれた「私」は他のクラスの代表者と放課後にピアノの練習をすることになった。

合唱祭十日前、五度目になる伴奏練習に行くと、島西君とペアだったはずなのに音楽室には早瀬君がいた。

「あれ？　早瀬君、今日だっけ？」

「ああ、島西に代わってって言われたんだ」

私が聞くのに、①早瀬君は申し訳なさそうに言った。

「そうなんだ」

「嫌だった？」

「まさか。そんなことないよ」

私は首を横に振った。早瀬君のピアノが聴けるのだ。嫌なわけがない。

「だといいけど。俺、他の伴奏者に嫌われてるみたいだから」

「どうして？」

「俺と伴奏練習になると、みんな誰かに代わってもらおうとしてる気がするんだよなあ」

それはきっと、早瀬君のピアノがうますぎるからだ。他の伴奏者は私と違って、本格的にピアノをやっている人がほとんどだ。並べて弾かされたんじゃ、たまらないんだと思う。

「考えすぎだよ。嫌われてなんかないって」

「そうかな？　俺以外はみんな、一年生からずっと合唱の伴奏してきただろ？　三年生から入った俺なんか、素人同然だもんな。ピア

ノは小さいころからやってきたけど、伴奏となるとやっぱ違うんだね」

早瀬君はどうやら本気でそう思っているようだ。鋭くハクリョク(ア)に満ちたピアノを弾くのに、早瀬君の心はまったくとがっていない。大人びた彫りの深い顔のせいか、どこか近づきにくい雰囲気があるけれど、そばに寄ってみると早瀬君に何の敷居も感じなかった。

「さあ、弾こうか。もう練習も最終段階だね」

菊池先生は入ってくるとそう言った。

この間と反対で、今日は早瀬君からの演奏となった。相変わらずのピアノ。早瀬君の奏でるピアノはどうしてこんなにも心に響(イ)くのだろう。「大地讃頌(だいちさんしょう)」はダイナミックでありながら、穏やかな光が満ちあふれている曲だ。そばで聴いていると、その光に自分も包みこまれていく心地がする。

その一方で、私は演奏になかなか集中できなかった。曲に入り込もうとしても、よけいな考えが頭によぎる。ピアノを前にすると、どうしてもあの夜の森宮さんとのやり取りが浮かんでしまう。不安定な思いは、追い払おうとすればするほどまとわりついて、演奏が終わるまで出て行ってくれなかった。

「ミスは全然ないけど、どこかたどたどしいかな」

菊池先生はそう評しつつも、私が自信を無くさないようにだろう、「でも、歌と合わせると十分だと思う」と付け加えてくれた。

音楽室を出ると、早瀬君に、

②「珍しい。森宮さんのピアノ乱れてたな」

と言われた。

「そうかな」

③「心ここにあらずって言葉たまに聞くけど、こういうのを言うんだと初めて見た気がする」

早瀬君が感心したように言うのに、私は「そんなにひどかったんだ」とがくりとした。

「全然ひどくはないけど。でも、どうしたの?」

「いや、まあ、そのただ、ちょっと父ともめてるというか……」
「お父さんともめたからって落ち着かなくなるの？」
早瀬君はよっぽど驚いたのか、低い声を校舎に響かせた。史奈や萌絵にも笑われたけど、父親ともめるのを気に病むのは、高校生にとってずいぶんおかしなことのようだ。
「やっぱり変かな？」
「変だよ変。親ともめるなんて［A］だろ？　俺なんか毎日母親といがみあってるのに」
北校舎にある音楽室から西校舎の三年の教室に戻るには一つ校舎を抜けないといけないから、けっこう距離がある。あちこちの教室から流れてくる歌声を聞きながら、私たちは歩いた。
「それは、その、お母さんと早瀬君は本当のとこでは信頼しあってるっていうか、絶対的に受け入れ合ってるからこそでしょう」
「どうだろう。とにかく俺、母親のことは苦手かな」
「親が苦手って、そんな人いるの？」
今度は私が驚く声が階段に響いた。
「親が苦手なやつなんて、いっぱいいるだろう」
「本当に？　早瀬君のお母さんって、本当のお母さん？」
失礼かなと思いつつ私が聞くと、早瀬君は「なんだよそれ。本当に決まってる」とげらげら笑った。
「血もつながってるし、顔も俺にそっくりだけど、どうも合わなくて。母親は自分がいつも一番正しいって思っているから、一緒にいると疲れるんだ」
早瀬君はそう言って、私に眉[a]をひそめてみせた。
史奈や萌絵のように、平気で親の文句を言えるのは、そこにはお互いを好きだという当然の感情があるからこそだと思っていた。だけど、例外もあるのだろうか。

「親子って、だいたいどこでもけんかしつつも基本は仲がいいものかと思ってた」
「森宮さんって、すごく大事に育てられてるんだね。④そんなことを信じられるなんて」
「そう、かな」
「そうだろう。父親ともめたぐらいで気に病むような高校生、初めて見た。そもそも、いったいどうしてけんかしたの？」
「なんていうか、うちにあるのは電子ピアノなんだけど、本当のピアノが欲しいって言って、そしたら変な空気になって……」
早瀬君に、森宮さんと血がつながっていないことを説明するのは気が引けたから、私はいざこざの発端だけを話した。
「森宮さんって、電子ピアノ弾いてるの？」
「ああ、まあ、そう」
早瀬君からしたら、電子ピアノなど楽器と認めていないかもしれない。私はまずいことがばれたように、「えへへ」と小さく笑った。
「俺、最初ピアノ聴いた時、森宮さん家ですごいいいピアノ弾いてるんだろうと思ってた。音楽室のグランドピアノにすんなり入っていって、きれいな音響かせて。普段からいい楽器を使っている人の出す音だなって」
「はあ……」
早瀬君がほめてくれるのにどう言っていいかわからず、私はあいまいに相槌を打った。
「俺、電子ピアノって弾いたことないけど、実はすごい楽器だったんだな」
「どうだろう……」
「どうだろうって、森宮さんいつも弾いてるんだよね」
「うん、そうだね」
実際に電子ピアノを弾いたら、早瀬君はおもちゃみたいだと思うだろう。⑤私はまた「えへへ」と笑うしかなかった。
合唱祭も四日後に迫った昼休み、向井先生に呼び出された。
察しはついた。昨日の英語の小テストは六十点だったし、今日の社会の単元テストも五十点に満たなかった。最近の小さなテストは

そろって点数が悪い。家でのどことなくしっくりいかない空気のせいか、何においても身が入らない日々は続いていた。

「森宮さん、小テストとは言え、ひどすぎない？」

進路指導室に入ると先生はすぐさまそう言った。

「はあ……すみません」

私は椅子（いす）に腰かけながら謝った。英語の小テストは復習だから、みんな八割は取れるような内容だ。私自身も八十点を下回ったことは一度もない。勉強しないと、どんなテストでも点が取れないということを思い知らされた。

「ついでに授業も上の空だしね」

「そう……ですか？」

注意されてもしかたがないところはあるけれど、上の空と言うほどひどかったのかと自分に苦笑した。

「伴奏練習のせい？」

「いや、それは関係ないです」

私はきっぱりと否定した。むしろピアノを弾いている時間があって救われている。伴奏練習がなければ、もっと家の中で落ち着かなかっただろう。

「じゃあ、何？　今は友達ともうまくいっているみたいだし、クラスメートともよく話してるようだけど」

案外、教室での様子を先生は知ってるもんなんだなと感心していると、

「これだけひどい点数取って、原因がないわけはないでしょう？」

と先生は鋭い声で言った。

「原因っていうか……」

私はどう言っていいものか考えながら、進路指導室の棚に目をやった。参考書や入学案内などがぎっしりと並んでいる。合唱祭が終われば、入試が待っているのだ。成績を下げている場合じゃない。

「勉強がおろそかになるなんて、かなり深刻よね」
「はあ……」
「いったい、なんなの？」
「あの、まあ、その、父と少しぎくしゃくしてるだけで」
追及から逃れられそうにないと私が正直に答えると、向井先生はエシンミョウな顔をした。
「ぎくしゃく？　お父さんと？」
「ええ、ああ、違うんです。そういうんじゃなくて」
義理の父との奥深い問題だと勘違いされないように、私は森宮さんとの一件を説明した。
「なるほど。お父さんもいろいろ気を遣ってくれているのね。でも、変よね。森宮さん、友達とけんかしても平気だったのに」
「そうですよね。……なんだか、家族みたいになるって、案外難しくて。どうしてもお互い変に気を回しちゃって」
「だけど、森宮さんはお父さんのこと森宮さんって呼んでるんでしょう？」
「ええ、まあ、森宮さん、父親って感じでもないですし」
泉ヶ原さんも森宮さんも、「お父さんと呼ぶように」と私に強制することはなかった。ある程度、大きくなってしまって、突然身内でもない人を「お父さん」と呼ぶのはとんでもない違和感がある。父親と認める認めないは別にして、「お父さん」とたやすく呼べるのは幼い時間を一緒に過ごしただけの人の気がする。
「じゃあ、何が普通かはわからないけど、⑥よくあるような親子関係なんて目指さなくたっていいんじゃないの？」
向井先生は、私の成績不振の原因がわかったからか、さっぱりした口調で言った。
「はあ……」
「一緒に住んでる相手と気遣い合うのは当然のことだし、それは遠慮してるからだけじゃなく、お互いに大事にしあってるからでしょう」

「そう、ですね」
「きっと、こういうことの繰りかえしよ。家族だって、友達と同じように、時々ぶつかったり自分の思いを漏らしてはぎくしゃくして、作られていくんじゃないの？」
「そうでしょうか」
「森宮さん、いつもどこか一歩引いているところがあるけど、何かを真剣に考えたり、誰かと真剣に付き合ったりしたら、ごたごたするのはつきものよ。いつでもなんでも平気だなんて、つまらないでしょう」
去年の進路面談で、先生に進路については真剣に考えたのねと言われたことを思い出した。今の私は、家族について、少し踏み込んだということだろうか。
「それにしても、クラスでのいざこざは平気だったのに、お父さんともめただけで勉強に手がつかなくなるなんて、よっぽど普段の家での居心地がいいのね」
向井先生はそう静かに笑った。
「どうでしょう……。クラスでもめてた時は、毎日餃子食べさせられてたんで」
「餃子？」
「ええ。うちの父、私にあれこれ食べさせるのが好きで。元気がないと餃子で、始業式ってだけでかつ丼。夏前には毎日ゼリー作ってたし。……あれ？　そういうとき、私が無理やりガマン(オ)して食べてても、気を遣うなって怒らなかったのに。まさか、森宮さん私が好き好んで餃子食べてるって思ってたのかな」
⑦私の言葉に先生はふきだした。
「おもしろい親子ね」
「いえ、まあ」
なんだか、私も笑えてきた。私たちの毎日は振り返ってみると愉快だ。

「そんなお父さんがいるんだったら、なおさら成績下げてる場合じゃないわよね」
さっきまで笑っていたのに、もう先生はいつもの厳しい顔に戻っている。
「とにかく、もっと勉強するように。受験は待ってくれないのよ」
「わかりました」
私はしっかりとうなずいた。

（瀬尾まいこ『そして、バトンは渡された』より）

設問において字数を指定された場合、句読点・記号も一字とする

問　一　二重傍線部ア～オの漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問　二　傍線部①「早瀬君は申し訳なさそうに言った」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分は他の伴奏者よりも明らかにピアノの技術が長けているので、伴奏練習で一緒になった「私」が自信を失ってしまうのではないかと感じているから。

イ　自分は他の伴奏者から避けられているのではないかと考え、伴奏練習で一緒になってしまった「私」に、嫌な思いをさせているのではないかと感じているから。

ウ　自分は三年生から伴奏に挑戦した身であるため、他の伴奏者よりも多くの練習機会を先生に用意してもらっており、その配慮を申し訳なく感じているから。

エ　自分に対する「私」の好意に薄々気づいているため、自分の存在が「私」の心を乱し、「私」が伴奏練習に集中できないのではないかと感じているから。

問三　傍線部②「珍しい。森宮さんのピアノ乱れてたな」とありますが、「私」のピアノが「乱れていた」のはなぜですか。五十字以内で答えなさい。

問四　傍線部③「心ここにあらず」と同じ意味で用いられている言葉を、本文中より五字以内で抜き出しなさい。

問五　[A]に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　言行不一致　　イ　井戸端会議　　ウ　喧嘩両成敗　　エ　日常茶飯事

問六　二重傍線部a「眉をひそめ」・b「気が引けた」とあるが、「眉をひそめる」「気が引ける」のそれぞれの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

a「眉をひそめる」

ア　思い出したくない過去の記憶を呼び起こしてしまい、悲しみに満ちた表情をする。

イ　他者の言動に対していらだちを覚えたり、理解に苦しんだりして表情をゆがめる。

ウ　笑ってしまうような事柄に対して、ユーモアを交えて語るときに困った表情をつくる。

エ　何かに不安を感じたり、他人の嫌な行為に不快感を覚えたりして顔をしかめる。

b「気が引ける」

ア　やましい感じがして気おくれがする

イ　弱点を突かれた気がして負い目を感じる

ウ　感情に整理がつかずにふさぎこむ

エ　前向きな気持ちになれずに面倒に感じる

問七　傍線部④「そんなこと」とは、どのようなことですか。本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問八　傍線部⑤「私はまた『えへへ』と笑うしかなかった」とありますが、この時の「私の心情」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ピアノの演奏技術を唐突に褒められたうえに、家で電子ピアノを利用していたことについて純粋に関心を寄せる早瀬君に対して、どのように言葉を返せばよいのか分からず、その場を笑顔でやり過ごすことしかできなかったという気持ち。

イ　ピアノの演奏技術を突然絶賛されたうえに、家で愛用している電子ピアノについても理解を示してくれる早瀬君に対して、感謝の言葉を伝えるべきだとは分かっていたが、照れくさくてうまく表現することができなかったという気持ち。

ウ　ピアノの演奏技術を称賛されただけでなく、早瀬君が自分に対して好意を寄せていることを感じたが、その思いをどのように受け止めればいいか分からず、その状況を笑ってごまかすことしかできなかったという気持ち。

エ　ピアノの演奏技術を認めてもらえたのは嬉しかったが、電子ピアノがどのような楽器なのかも知らない早瀬君に落胆し、どう返答するべきかが分からなくなって、苦笑いを浮かべるしかできなかったという気持ち。

問九　傍線部⑥「よくあるような親子関係なんて目指さなくたっていいんじゃないの？」とありますが、「向井先生」は「私」に「森宮さん」（父）とどのように関係を築いていくべきだと考えていますか。四十五字以内で答えなさい。

問十　傍線部⑦「私の言葉に先生はふきだした」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　クラスでのいざこざがあった時にも、進路について真剣に考えた時も、基本的に動揺を見せなかった「私」が、食事のことになるとつい感情的になる姿を見て、おかしさを感じたから。

イ　家庭でもめただけで勉強に手がつかなくなってしまった「私」が、餃子を食べることによって自分の気持ちを抑えていたことを知って、単純な「私」の行動におかしさを感じたから。

ウ　「お父さん」とぎくしゃくしていると言っていた「私」が、「お父さん」の作ってくれた料理をめぐって食卓で何気ない会話をしていることにおかしさを感じたから。

エ　家族について少しだけ真剣に考えながらも、家庭での環境に違和感と不安を感じていた「私」が「お父さん」の作ってくれた料理によって心を和ませていることにおかしさを感じたから。

問十一　本文の内容と表現についての説明として適当でないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　第三者の視点で物語が展開することで、「私」だけでなく、「私」を取り巻く「早瀬君」や「向井先生」の心情も丁寧に描かれている。

イ　会話文を中心に物語が展開していくなかで、「……」という表現が多く用いられているが、この表現は「私」の複雑な心情を表すのに効果を発揮している。

ウ　「早瀬君」が大地讃頌を演奏する場面は、ダイナミックで穏やかなピアノの音色だけでなく、「早瀬君」の存在に「私」が光を感じる象徴的な場面である。

エ　「ぎくしゃく」「ごたごた」「さっぱり」「きっぱり」といった修飾語を多用することで、登場人物の心理状態や物事の状況を巧みに表している。

オ　合唱祭を成功させるために作戦を練り、様々な人との交流を通して目的を達成しようとする「私」の葛藤を、細かな心理描写や面白みのある会話のやりとりによって表現している。

カ　「私」と「早瀬君」のそれぞれが当たり前だと思うことについて意見交換をすることによって、「私」の状況が相対化され、自分と異なる考えがあることに気付く「私」の様子が表現されている。

国内帰国生入試

令和３年度　高校入試　国語

解答用紙

受験番号	
	氏名
	得点

【一】

問一
ア
イ
ウ
エ
オ

問二
a
b

問三
A
B

問四
〜

問五

問六

問七
〜

問八
20
30

問九

【二】

問一
ア
イ
く
ウ
エ
オ

問二

問三
20
50
40

問四

問五

問六
a
b

問七

問八

問九
20
40

問十

問十一

国内帰国生入試

令和３年度　高校入試　国語　解答用紙

受験番号	
	氏名
	得点

【一】

問一　ア　率先　イ　洗練　ウ　輸送　エ　許容　オ　ぼうだい

問二　a　ウ　b　ア

問三　A　ア　B　イ

問四　できるだけ～なくすこと

問五　ア

問六　エ

問七　廃棄を運命～されること

問八　必要でもないものを所有すること

問九　は快適ではないということ。　20

①点　問一
②点　問二
③点　問三、問四、問五、問六、問七
⑦点　問八
⑧点　問九

【二】

問一　ア　迫力　イ　ひびく　ウ　ほったん　エ　神妙　オ　我慢

問二　イ

問三　義理の父にあたる「森宮さん」とのいざこざが「私」の頭をよぎり　20　演奏に集中するこ　40　とができなかったから。　50

問四　上の空

問五　エ

問六　a　エ　b　ア

問七　けんかをしていても親子の仲はいいこと

問八　ア

問九　衝突することを恐れることなく、親子で互いの思いを伝え合って関係を築けばよいという　40　関係

①　問一
②　問四、問六
③　問二、問五　問八、問十、問十一
④　問七
⑥　問三、問九

問十　ウ

問十一　ア　オ